

上野の森キリスト教会 日曜礼拝
宣教支援礼拝メッセージ

「弱いときにこそ強い」とは
コリントの信徒への手紙二 12章1節-10節

2021年5月30日

松坂智広

1

皆さん、お早う御座います。今日、皆さんと共に、主に礼拝をささげられることが出来る恵みを感謝します。

昨年11月に、岡野栄光兄弟がファーストバッターとして、私達の教会で、「私の恥を取り去る方」というタイトルで、ルカによる福音書1章から、宣教支援礼拝メッセージをされました。クリーンヒットで1塁に進出。さて、セカンドバッターとしてバッターボックスに立たされた自分に出されているサイン……。それは、送りバントです。確実にランナーを2塁に進め、続くクリーンアップのバッターであるメッセンジャーに託したいと願っています。

今日の聖書箇所を朗読いたします。コリントの信徒への手紙二12章1節-10節、新約聖書339ページから340ページにかけてです。

(聖書朗読)

もう随分前、何年も前のことですが、日曜礼拝が終わって、皆さんと共に4階で昼食を済ませたあと、金山長老が小さなお孫さん(誰だったのかは分かりませんでした)を抱きかかえながら、賛美歌を歌われていたのですね。皆さん良くご存知の「主われを愛す」でした。

「主われを愛す 主はつよければ われよわくとも おそれはあらし」・・・と。「われらを」ではなく、「われを愛す」なんですよね。「われらよわくとも」ではなく、「われよわくとも おそれはあらし」なんです。イエス様とのパーソナルな関係、イエス様はあなたを、そしてわたしを愛してくださっている！今日の聖書箇所のハイライトです。

これだけで十分ですので、本日のメッセージは以上となります。・・・と、言えるかも知れませんが、皆さんともっと分かち合う時が与えられていますから、続けさせていただきます。

まず最初に、パウロは、自分自身の中にある「二人の人間」を区別していることです。

パウロは、彼の使徒性について、終始攻撃されていました。イエス様の12人の直弟子ではないことなどからそのようになったのですが、彼はついに爆発したかのよ

うに、自らの霊的体験を語ったのです。1節から語られていて、「キリストに結ばれた一人の人を知っています」、「その人」、「そのような人」という、まるで第三者で自分自身ではない存在のように語っているのですが、それは、紛れもなくパウロ自身のことです。いわば、「霊的な人」というべきでしょうか。もう一人の自分は、「地上的な肉の人」である自分自身です。

「わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、」と、断りながらも、です。

語ったのですね、樂園まで引き上げられた体験を。

しかしながらパウロはその後で、「だが、誇るまい。」と断言し、むしろ誇るべきことは、「自分自身については、弱さ以外にはない。」と、はっきりと明言します。7節から、「地上的な肉の人」としてのパウロが登場します。

2

「それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげがあたえられました。」と、パウロは語ります。パウロに与えられた「とげ」とは何だったのでしょうか。それは「病」であったと、しかも「目の病ではなかったか」と、多くの人が考えているようですが、その説が有力のようです。 「サタンから送られた使い」・・・皆さんは、何を連想されますか。はい、ヨブ記のヨブに起こった出来事じゃないでしょうか。その話は、別の機会に皆さんと分かち合える時が与えられることを願いますが、今日は、パウロが語った「この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました。」に、フォーカスしてみましよう。「三度主に願いました。」しかしながら、何度も祈ったパウロの願いは、聞き入れられませんでした。イエス様も、ゲッセマネで三度、父なる神に祈られました。マタイによる福音書26章39節です。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」と。そして十字架にかけられたイエス様は、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」・・・と。

昨年7月の日曜礼拝で、重田先生が、「私のために生きてくださる神」と題して、詩篇

22篇からメッセージされたことを思い出します。詩篇22篇1節、「わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせずうめきも言葉も聞いてくださらないのか。」と、記されています。

極限の苦悩からの、神様による偉大な救いが、詩篇22篇でうたわれています。
イエス様は十字架につけられ、ダビデと同じように叫び声をあげられました。「わが神」と、呼んでいるのは、ダビデの、そしてイエス様の嘆き悲しむ声だけでなく、そこに神様への揺るがない信頼があったからこそ、というべきではないでしょうか。嘆きが賛美へと、感謝へと変わっていく。「私のために生きてくださる神様」の愛にどうこたえたら良いのでしょうか。22篇7節で、「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥。」と、記されていますが、それはまさに自分に対して言われているのだと、実感します。事実、そうですから！しかしながら、そんな自分のために、ありのままの弱い自分を受け入れて生きて働いてくださっている神様。ならば、「神様のために生きる」そして、「隣人のために生きる」そのためには、「自己中心的な愛とは違う、本当の自分を愛する」ようにかえられていくこと、「自分の世界から出て行き、大宣教命令に従うことだ！」との、重田先生のメッセージだったと記憶しています。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる。」1対1のパーソナルな神様との関係、決してあなたを見捨てない！との神様のお約束、感謝ですね！

さて、私事ですが、自分にも一つの「とげ」が与えられました。46歳の時に、脳梗塞を患いました。あれからもう10年以上経ちますが、今でも左半身が麻痺しています。あの頃は本当にどん底の生活を送っていました。強がって生きていた自分が、粉々に打ち砕かれました。あの頃の自分が、今現在の自分を想像をできたでしょうか。

脳梗塞という病にかからなかったなら、神様との出会いはなかったことでしょう。神様のご計画・摂理は、人知では計り知れない壮大なことだと今、感謝とともに実感しています。この病とは一生付き合っていくことですが、イエス様がその痛みや苦しみを絶えず共に担ってくださっていることを知る。それ以上に、イエス様が十字架でお受けになったみ苦しみには比較出来ないことを知りました。父なる神様の愛が、御子主イエス・キリストを通して、こんなにも弱い自分に注がれていることを知りました。

3

きっと、皆さんにもそれぞれに与えられた「とげ」があることでしょう。それが病であるかも知れません。あるいは人間関係の悩みや、仕事の問題、家族の問題、経済的な問題、愛する人を失った悲しみ・・・、人それぞれに、その人に与えられた「とげ」によって、弱い自分を見出す時があるでしょう。しかしながら、私達が弱くな

りきれた時こそ、救い主、主イエス・キリストの恵みをより深く知るときであり、より深く祈るとき、となります。

私達の生涯は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」という主の御言葉に、支え続けられるのです。

「弱いときこそ強い」とは、どういうことでしょうか。「キリストの力が、わたしたちの内に宿るように」と、わたしたちが祈るとき、どんな困難があろうと、キリストがわたしの内に生きておられ、わたしを生かしてくださっていることを、確信する時なのです。

イエス様がいつも共にいてくださる、その喜びと感謝をもって、今週も過ごしてまいりましょう。 お祈りいたします。

祈り

優しい天のお父さま、すべての恵みを感謝いたします。主われを愛す。主は強ければ、われ弱くとも、おそれはあらず。なんと感謝なことでしょう。どんな困難の中にあっても、

いつもイエス様が共にいてくださり、わたしの痛み、悲しみ、苦しみさえも共に担ってくださっていることを覚え、こんなにも弱いわたしが、イエス様によって守られ、生かされていることの喜びを、賛美と感謝をもって、これからも歩んで行けるますように、またその福音をのべ伝える者として用いてくださいますように、主よどうぞ導いてください。主にあっての家族、一人ひとりの健康を、この一週間も守ってくださいようにお願いいたします。

わたしたちの救い主、いつも共にいてくださるイエス様の御名によって、お祈りいたします。 アーメン。